

中井虎男先生

われわれはその人の倂をしのぶだけで心温り生くる悦びを覚えるような人との道縁に侍ることができれば、それは何物にも代え難い人生の恩寵である。又その人の人となりを懐うことによつて常住坐臥、道心に遷ることができるような人の倂を心に持つことができれば、それ程の人生に対する奨励はないと言えよう。

中井虎男先生は、私にとつては、正にそういう掛替えのない人であり、導師である。母校三豊中学（現観音寺一高）創立以来、数学の講筵こうえんをもたれ、その円満具足した御人格と深い数学的教養に傾倒していない同窓は一人もない。

私の記憶にして誤りがなければ、先生は青年時代から胸の病をもたれていたようである。そこで、春夏秋冬を問はず、早朝冷水を浴びて、心身の鍛錬に御精進されていた。中学時代そのお話を承つてから、私はその衣鉢をついで、今日まで冷水浴を励行している。それは今日の私の一番大切な保健法である。尤も七十歳を超えられてから、先生は刺激が強すぎるというので冷水浴は

止められたそうだ。

御退職の後、先生は、生村たる大野原村の村長を長く勤められていたが、村長公選と共に御辞退されて、村民から慈父のように敬慕されつつ寒竹のような簡素な生活環境の中に悠悠自適されている。私が帰省する度毎にヒヨックリ自転車を駆って訪ねてくれる。「唯君の顔を見に来たのだよ」と言つて童顔をほころばせて微笑まれる。偶には子供さんにやってくれと言つて「梅ヶ枝」等をとどけていただいたりする。「年をとつた老人にとつては、人様の御邪魔にならないように心懸けなけりや」と言われたりする。こうして谷間の奥深く、大きい古木は、人目にたたないように、静かに世相の過ぎ越し方と過ぎ行く方を、温い慈眼で見守つて居られる。しかしその樹蔭には、先生の徳を偲ぶ多くの子弟が、朝な夕なそつとより添つて、人生の疲れを慰して居るのである。

先生も、去年は目出度く喜寿を迎えられた。耳が少し遠くおなりになつたが、極めて健康であられることは嬉しいことである。人生の夕暮れに際して、「人様に御迷惑にならないように」とそつとして枯淡な余生を童心を以て楽しまれて居る先生に、風よ柔け雨よ避けよと祈らずにはいられない。(昭、三〇・八)